

どうして、こんなことになっているのだろうか。

最初の挨拶を思い出す。

今期からこちらの部署でお世話になります、事務の白瀬です、と挨拶をしたときだった。イヤフォンを外し、表情ひとつ変えずにこちらを見た黒崎先輩は、形式張った「黒崎です、よろしくお願いします」のあと、まるで興味なさそうな……むしろ煙たがるようなトーンでこう言った。

「……形に残らないのが嫌なので、用件があれば社内チャットでどうぞ。雑談ならご自由に……俺以外の、他の人と」

それが、今はどうして――

「白瀬さん、やっぱりまだ残ってた。はいこれ、ミルクティー好きだよね」

「黒崎先輩！？　うわあ、好きです、ありがとうございます……わっ？」

「白瀬さんさ、いつもそのデータ入力する時に残業してるよね。なんかマクロ組めないか

な……ちよつと見せて」

こんなにも、話しかけられるようになったのだろうか。

高い背を屈ませて画面を見つめる黒崎先輩にドキッとする。

あんなことを言っていた黒崎先輩だったというのに、今はこんな感じだ。残業しているときや、一人でいるとき、何かと理由をつけて話しかけられるようになった。

しかもその時の顔がやたら近い。端正というよりほかない顔面がわたしのすぐ隣に寄り添ってくる。

（本当に、どうして……ていうか、他の人、もういないよね……？）

こんなことがバレやしないだろうかと、ドキドキよりもヒヤヒヤが勝る。

涼しげな顔立ちで女性社員人気ダントツトップを誇りながら、コミュニケーション嫌いで誰とも馴れ合わないと有名な――

そんな黒崎先輩から、直々に話しかけられている、なんて。



ろくもくうとぎ

絢辻透

「ふう……」

ヒヤヒヤはしたけれど本当にありがたかったな、なんて先週のことを思い出す。

黒崎 響（くろさき ひびき）先輩は、外資系企業から引き抜きの優秀なシステムエンジニアだ。

あのとき黒崎先輩に組んでもらったマクロというもので、今週から作業がすっかり楽になった。

ようやく毎週のような残業から解放されそうなので、今日は少し余裕ぶって、給湯室でミルクティーを淹れて優雅な休憩タイムと洒落込んでいたのだが――

「あ。やっぱり、白瀬さん居た」

「黒崎先輩……!!? お、お疲れ様です」

入口から黒崎先輩が顔を覗かせた。

先輩も休憩だろうか。高い背を屈ませて入ってくる先輩に思わずぱちりと瞬きをする。

「あ、まだポットにお湯残ってますんで、よければ……」

「お湯は平気、俺が用あんの白瀬さんだから」

「えっ、わたしですか？」

「うん、中々チャンスなくて、休憩中にごめん。この間のマクロどうだったかなーって」

——やっぱり。

薄々は感じていたことだけれど、黒崎先輩は話しかけると、あえてわたしが一人のときを選んでいるようだった。

正直言っその配慮はありがたい。話している現場を他の人に見られたら、黒崎先輩をほとんど神聖化している女性社員たちや、お喋りな男性社員たちに何を言われるかわからないから。

「すごく楽になりました！ 今週から残業しなくてすみそうです。ありがとうございます、黒崎先輩」

「本当？ なら良いんだけど、使いづらいなーってトコ、ない？」

「いえ、とつ、特には……っ」

思わず声が裏返る。

こちらを覗いてくる顔が近かったからだ。切れ長の目に少しかかるくらい、傷ひとつないさらさらの黒髪があまりに綺麗で緊張してしまう。

瞳も髪の毛も、光を反射しているところだけ紫がかって見えて、宝石みたい——なんて場違いに思っていたら、ふとその視線がわたしの顔より下へと落ちた。

「……うさぎだ」

「えっ？ あつ、これですか」

独り言のような呟きに心当たりがあり、同じように視線を下げた。

わたしが持っているミルクティーの入ったマグカップには、フチに小さなうさぎが引つかかっているようなデザインが施してある。

雑貨屋で一目惚れして購入して、たまの休憩の時にだけ使うようにしているものだ。

「へへ……ちよつと洗いにくいんですけどね、可愛くて買っちゃいました」

「ふーん……」

カップを少し持ち上げてみせると、いつも流れるようにタイピングをする細くて長い指が伸びてきて、ぶら下がるうさぎの耳をそつと撫でた。

少し意外だ。こういうの、黒崎先輩は好きじゃなさそうなのに——なんて思っていたら、突然目が合った。

「……可愛いね」

「へあっ!？」

思わぬ一言に心臓が跳ねた。

変な声と一緒にびくつと肩が揺れてしまつて、手にミルクティーが飛び散る。淹れたてではないので熱くはないが、ベタベタになつてしまつた。

「ごめん。そんな驚くと思わなかつた」

「だ、大丈夫ですつ、わたしこそ変な反応してすみません……っ」

目を見開いた黒崎先輩がポケットから小さなウェットティッシュを出してくれる。

恥ずかしい。うさぎに可愛いと言っているだけだろうに、勘違いしたみたいな反応をしってしまった上、こんな醜態を晒すなんて。

慌ててカップを置いて手を洗おうとしたら、なぜか手を取られてしまった。

「あー……やっぱベタベタになってる」

「そそそそんな、黒崎先輩、自分で拭けますから……っ！！」

「俺の所為だし。てか白瀬さん、手えちっちゃ……」

独り言のような呟きに思わず頬へと熱がこもっていく。ろくな抵抗もできないまま、細くてきれいな手に包まれながら、ウェットティッシュでやさしく拭われてしまった。

心音が鳴り止まない。こんなの恥ずかしいし緊張するし、何よりやっぱり。

（だつ、誰かに見られたらヤバイ……！！）

あの黒崎先輩にこんなことをさせているなんて。

丁寧指の間までも拭かれて、いたたまれなさに唇をぎゅつと噛みしめる。

「……ん。よし、綺麗になった」

「ううつ、あ、ありがとうございます、……っ!？」

ようやく解放され、ほっとしたタイミングで顔を上げると、給湯室のドアの向こうから「お疲れ」と聞き覚えのある声が聞こえて思わず息を詰めた。

電話中だろう。あの声は、わたしが元々配属されていた営業部の森下先輩だ。

仕事は出来るし、そこそ格好いいけれどお喋りで、良くも悪くも悪目立ちすること
有名な。

「くくく、黒崎先輩つ、わたし時間なので、戻ります……!!」

「え、もう?」

「すみません、お疲れ様です……今度、マクロのお礼させてください……!」

変なタイミングで切り上げている自信はあるが、森下先輩に喋っているところを気づかれでもしたらかなわない。

わたしは深々とお辞儀をすると、マグカップを握りしめたまま給湯室から退散した。幸いなことに、通りすぎる森下先輩はやはり電話中だったようだ。笑顔で手を振られただけで、給湯室に黒崎先輩がいたことは気付かれなかったようだった。

（はあ、良かった……）

ほっとしながら席に戻る。

本当に、どうしてこんなことになったのだろうか。

心当たりはあると言えはあるのだが、今思い出してみても、こんな風に目をかけてもらうようになるほどのことではなかったような気がする。

黒崎先輩がわたしに声をかけてくれるようになった、最初のきっかけは——……

「黒崎先輩、白瀬です。突然申し訳ありません。社内アプリについてお聞きしたいことが

ありまして、メッセージいたしました”

“何ですか”

社内システムのアプリの表示がわたしのPCだけおかしくなってしまうのを他の先輩に聞いても解決できずに、黒崎先輩に聞くように言われたときだった。

（噂通りの即既読爆速レスだ……）

送ってから五秒くらいしか経っていないのに返事が来た。

仕事に関するチャットだと異様に返事が早いと聞いたことがあったけれど、本当だったらしい。わたしは五分くらい悩んでようやく当たり障りのないメッセージを送っただけだというのに。

そこから、わたしのPCでは社内システムの表示がおかしくなってしまうことを相談すると……気だるげな様子で、黒崎先輩が席まで来てくれたのだ。

「どれ。見せて」

「あ、ありがとうございます。あの、このページがどうしても表示されなくて。ファイアウォールの設定変えてみたり、再起動は試してみたんですけど、やっぱり開くとサーバーと接続が切れちゃうみたいで……」

「ふーん……なるほどね。というか、白瀬さん」

「はい？」

「なんでWASDの位置に指置いてんの」

「はっ……」

ふっと笑われて慌てて手を引っ込める。

今やっているFPSゲームの癖で位置が固定されてしまっていた。

恥ずかしさにカッと顔が熱くなる。

「すすすみません、今やってるゲームの癖が……っ」

「そんなことある？ てかゲームとかやるんだ、白瀬さん……どんなのやってんの」

「鋭意練習中でして……あ、えっとVALOXっていうゲームを」

「ああ。俺もやってる」

ちょうどその頃は、友達に誘われて始めた、初めてのFPSゲームを必死に練習しているときだったのだ。

黒崎先輩はそのままわたしとゲームについてのちょっとした雑談をしながらPCを操作していたかと思えば、あっさりとシステムの表示を直してくれた。

ついでにわたしがエイム……照準合わせが難しくて困っていることを聞くと、エイム練習ができるブラウザページまで教えてくれた。

「始める前とか、ランクマ潜る前とか……こういうの、やると違うかもね」

「うわあ、こんなのあるんですね？ やってみます、ありがとうございます！」

「どういたしまして。ふ……表示直すのよりありがたがってるじゃん」

「あついえ、表示もすごく助かったんですけども……！」

くすくすと笑われながらも、教えられたエイム練習のサイトをメモして……そこから数週間後、チャットで業務連絡がてら、報告してみた。

面倒だと思われるかもしれないし、無視されるかもしれないけれど、一応お礼を言いた

かったのだ。

“——連絡は以上です。それとVALOX、先輩の教えてくれたサイトのおかげで無事にランク上がりました。ありがとうございます”
“了解しました。ランク上がったのは白瀬さんの力”

業務連絡の最後に付け加えられた一言を見て、一人でふふつと笑って。

——そこから、こんなに話しかけられるようになったのだった。

（思い返してみても、そんなに大したことじゃないような気がするんだけど……ゲームやってるのが珍しかったのかなあ……）

不思議に思いながら席に戻り、ミルクティーを飲みながら社内カレンダーを開く。

そういえば今週末、飲み会があるんだった。

ちよつと面倒だなあとはいつつ、今回は懇親会で参加費無料だからね！ という部長の言葉にまんまと乗せられ参加のチェックをつけてしまった。

まあタダでご飯食べられるならいいか、なんて思いながら参加リストを見る。

（懇親会だからかな、人数多い……。森下先輩はもちろん参加だ。黒崎先輩はもちろん不参加——……え？ あれ、嘘……。参加のチェック、ついてる）

驚きに目を見張る。

今まで一度も、黒崎先輩がこういう飲み会に参加したことなんかないはずだった。

なるほど、参加人数が多いのはこういう訳か……。と納得する。

とはいっても大勢の人前で黒崎先輩が話しかけてくることはないだろう。たぶんずっと女性社員にチャホヤされていて、わたしと話す隙なんかないはずだ。

そう思って一人頷くと、粛々と入力 of 作業に戻った。



「白瀬さん、白瀬さん。こっち、凭れて」

「うあ……はい……ありがとう、ございます……」

……あれ？

わたし、どうしていたんだっけ。

たしか今日は……参加費無料の飲み会に行って、居酒屋で楽しく飲んだり食べたりしていたはずだ。それなのに、どうして黒崎先輩の肩に凭れながら、ソファに座って――

「？ あ、え……？？ どうして……わたし……」

「あ。ちょっと覚醒した？ 白瀬さん、かなり酔ってて危なかったから。駅まで送るって言って抜け出してきたんだけど、覚えてない？」

「……！？ う、うそ、すみません……えっ……？？」

まさか寝てしまうなんて。

というか、黒崎先輩に送ってもらってしまふなんて。

二重の驚きに飛び起きかけてわたしの顔を覗き込まれて身体が固まる。そういえば森下

先輩に勧められるまま、カクテルを何杯も飲んでしまったような。

それを、黒崎先輩が助けてくれたような……。

“白ちゃん、次このカクテルいつとく？　ほら、期間限定で美味しいらしいよ”

“ん……あ、はい、じゃあ……”

“いい加減にして下さい、森下さん。白瀬さんもうボーっとしてるじゃないすか、アルハラですよ”

「お、思い出してきました……助けてくれて、ありがとうございます」

「ううん。ぼんやりしてて心配だったから……駅より会社のほうが近かったし、休憩室なら休めるかと思って。水飲めそうなら、飲んで」

「お水まで……ありがとうございます」

もらったペットボトルのお水を飲みながらピントの合わない視界で見回す。

比較的新しい設備の揃った我が社には、休憩室に仮眠ができるソファが置かれている。わたしたちが座っているのはそのソファのようだ。

近いとはいえ、わざわざ会社まで戻ってもらうなんて申し訳ないことをしたな……と考えたところでふと、黒崎先輩と、まるで恋人同士みたいな距離感であることに気がついた。

「あつ、ごっこ、ごめんなさい、わたし平気なので……すぐ帰りま、ひゃっ」

「駄目。ふらついてるじゃん」

「あ、わ、わ……っ!？」

慌てて立ち上がろうとしてふらつく身体を押し戻されてしまった。

そのままわたしの正面に向き直った黒崎先輩が顔を寄せてくる。迫りくる顔に思わずきゅっと目を瞑ると、こっん、と額を合わせられた。

状況に頭がついていかない。間近に迫る端正な顔が少し火照っていて、もしかしたら先輩も酔っているのだろうか……？　なんて思う。

「うわ、あつつ……。白瀬さん、もう飲み会参加すんのやめれば。森下さん、絶対白瀬さん飲ませてお持ち帰りする気だったでしょ」

「そっ、そんっ、なことは……っっていうか、あの黒崎先輩、ちょっとあの、ち、近いんです

が……………」

「…………やだ？」

「嫌というかつ…………恥ずかしいので、うひゃっ!？」

黒崎先輩は体勢を変えてくれないどころか、両腕をわたしの横の壁についてくる。

まるで腕の中に閉じ込められてしまったようで心臓が鳴り止まない。そのままうなじへと鼻先を寄せられて、すん、と首筋の匂いを嗅いできて、またぶわりと身体が熱くなった。

「俺というより、森下さんにお持ち帰りされたほうがよかった？」

「へっ!？ いや、そんなことは全く、ありがたかったです…………でも、な、なんでこんな…………ひゃ、」

「…………俺、結構モーションかけてたつもりだけど。気付いてなかったんだ、白瀬さん」

そっと手を掬われる。

伏せた目と共に、やっぱり手ちっちゃいね、と囁かれて喉がきゅつと締まった。わたしより少し体温の低い、骨ばった手に包むように握られて唇を寄せられて、いよい

よ現実が受け止めきれなくなってくる。

「そっそんな、だってわたしより、もっと可愛い、ひとは……っ」

「……ふーん。そういうこと言っちゃうんだ、白瀬さん」

少し不満げに眉が潜められた。混乱する頭に染み渡るような、いつもよりも低い声を出されて、そのまま、ちゅ——と。

耳元に唇が寄せられて、びくりと肩が震える。

「言っとくけど、こないだ可愛いって言ったの……うさぎに、じゃないから。うさぎのマグカップ大切に持ってる白瀬さんが可愛いって事ね。わかんないなら、わかるまで言うから、覚悟して」

「う、うそ……ひやつ♡ ま、って……あつやだ、耳……」

「耳弱いのか？ さつきから俺がちよつと喋る度ビクビクして、かわいい……」

これはもう夢なのではないだろうか。

そう思うのに、熱い息が首筋にかかってくる感触がどうにもリアルだ。細く骨ばった手
がいつの間にか顎を撫でて、わたしの顔を柔らかく持ち上げた。

「く——くろさき、せんぱ……っ」

「ごめん。嫌なら振り払って。俺からは、ちょっと逃がしてあげらんない」
「そんな、できな……っん、うう……っ!?!?♡」

ちゅう……っ♡

柔らかい唇がわたしの唇と重なった。

薄らと目を開いたままの黒崎先輩が、驚くわたしを見て目元を緩ませる。その瞬間に身
体の力が抜けてしまった。

全身が火照るように熱っぽいのがお酒のせいなのか黒崎先輩のせいなのか、わからない。

(うそ、どうしよう……黒崎先輩にキスされちゃった……なんか、ゆるゆる唇擦られて……
甘ったるいキス、されて……♡ どうしょ、どんどん力抜けて……頭、ふわふわしてきちや
う……♡)

「……キスだけでそんな顔すんの？ 駄目だよ、そんなの。やめてほしいなら、逆効果だよ……？」

「ふあ、あ……あつ？ うそ、まって、あ……せんぱい、だめ、脱がしちゃ……っ♡」

ぷちつと小さく、シャツのボタンが外される音が聞こえた。

どこまでも器用な細い指があつという間に服の中に滑り込んでいく。汗ばんでいて恥ずかしい、と思う間もなく、ぱちんっ♡ とブラジャーが外されてしまった。

「あー……肌すすべで気持ちい……。もじもじ身体揺らしてんの、やだってこと？ 可愛いだけなんだけど」

「うう……やだと言うか、あ、汗かいてて、きたないので、っや♡ んん、もむの、だめっ、うう……っ♡」

力を入らない身体で必死に身じろいでいたら、むにゅっ♡ とおっぱいを揉みしだかれてしまった。

柔らかな手つきにぞくぞくと背筋がわななく。ただ揉まれているだけなのにどうしてこんなに反応してしまうのだろう。

さつきキスされてから、身体がおかしい。

「汚くないよ、もちもちでふわふわで、ずっと触ってたくなる……。汗なの？　これ。なんかすごいあまーい匂いするね……」

「っひ……。♡　わ、わたし……。香水とかは、なにも、あうッ！？♡」

カリ……。♡

切り揃えられた爪先が柔らかくわたしの乳首を引っ掻いた。

慌てて声を抑えようとしたけれど近づく黒崎先輩の顔で阻まれてしまう。嬉しそうに目を細めてまたキスをされた。

「めっちゃ可愛い声出すじゃん……。ここ好き？　ていうかキスも好きでしょ、さつきからどんどん顔とろけてきてる……。いっぱいしょつか、キス」

ちゅ♡ ちゅうつ♡

カリカリカリ……♡

甘ったるい触れるだけのキスと共に、擦るように胸のさきっぱをいじられて頭がふわふわとする。忍び寄る快感にどんどん力が抜けて、求めるように顔を上げてしまう。

「は……ふぁ、ん……♡ ううつ、だ、め……♡」

「とろつとろのあまーい声かわい……。白瀬さんってもしかして、結構えっちなこと好き……？」

「そつ、そんな、こと……うぁ、あつ♡ だめ、ちくび、いじっちゃ……やぁぁ……っ♡♡」

すりすり♡ くにっ♡

こすこすこす♡

熱っぽい囁き声と共に、むく……♡ と勃起上がった乳首を指先で擦られてお腹に疼きがたまっていく。

否定も抵抗もろくに出来ないままシャツを肩から落とされて、腕に引っかかっているだけだったブラジャーも取られてしまった。

（こ、こんな……♡ 駄目なのに……会社でえっちなこと、されて♡ わたし、興奮しちゃってる♡ 抵抗しなきゃいけないのに、キスされながら乳首カリカリされて……力入んない……あ♡ だめ♡ つまんだ先つぽ、こすこすするの、きもちよくて、だめ……っ♡♡）

「すご、むくむく勃起してきてる……白瀬さん、会社で俺に乳首いじられて気持ち良くなってるんだ……？」

「っや、やだ、言わないで、んん……♡ つく、ん、うう……っ♡」

「ああ、言葉にされると余計感じちゃう？ 一生懸命エッチな声堪えてんのすごい可愛いけど、だーめ。ほら、お口開いて……？」

ちゅ♡ れろ……♡

カリカリカリ♡

柔らかく押し付けられた唇から熱い舌が覗いて唇の隙間をなぞる。その間も乳首をカリカリ♡ する指は止めてもらえない。

襲う刺激に耐えかねてわずかに開いてしまった唇を割り開かれて、舌先を絡め取られて

しまった。

「ふあ♡ んう……♡ ら、め……あ、ふ……ッ♡ つうう、だめ、きす……♡♡」
「んー……？ うん、キス駄目だよね……ちよつと深いのしただけで、俺にしがみついて腰
ゆらゆら……♡ ってしちゃうもんね……」

継るように伸ばした腕は、気がつけば黒崎先輩の首へと回っていた。

酸素が足りなくて頭がぼんやりする。舌を絡ませられて、乳首を優しく引つかかれている
だけなのに、腰が揺らめいてしまうのを止められない。

「あ、や、ちが、っあう！？♡ ま、って……足やだ、ひらいちや、……っ♡」

「やだじゃないでしょ、腰揺れてたよ？ 俺の腰におまたスリスリしようとしてたくせに……
ああ、スリスリできなくなっちゃったから嫌なの……？」

唇を離された途端、ぐ……っ♡ と力を込められて、足を開かされてしまった。
会社用のタイトなスカートを捲られる。中を見られた途端、ク、と喉奥で笑われた。

恥ずかしさに腰が引ける。

「あー、すつご……♡ パンツに染みて糸引いちやってんじゃん、エロすぎ……」
「や、やつ……みないで、おねが……っひいん♡♡ あ、あっ!?!♡ だめそれっ、せんば、あッ、やああ……っ♡♡」

ぬちゅっ♡ ぬりゅ♡

カリカリカリ♡♡

わたしが溢れさせてしまった愛液をまとった先輩の指が、数度パンツのクロッチ越しにおまんこの筋をなぞったかと思えば、すぐにクリトリスへと辿り着いた。

膨らんだそこを可愛がるように優しく引っかかれて腰が浮く。

(あ♡♡ あ♡♡ だめ、これ、だめ♡♡ い、いつも自分でするときより……弱あく擦られちゃうの、だめ、きもちいいよ♡♡ うう……こんな腰浮かせてたら、欲しがってるのバレバレなのに、あ♡♡ 裏筋こすこすだめ、きもち、い……っ♡♡)

「……白瀬さん、めっちゃクリでかくない？ パンツの上からでもわかるくらいなんだけど……手はあんなにちっちゃいのに、クリはおっきいんだね……」

「ッ!？ ち、ちが、おっきくないい、うあ♡ あっ♡ やっ、裏筋やらっああっ♡♡」
「おっきくないクリだったら、裏筋こんな簡単にすりすりできないって。もしかしてココ、毎日自分でいじってる……?」

カリカリ♡ こすこす♡

こりゅこりゅこりゅこりゅ♡♡

絶え間なくぬるついた指に裏筋をなぞられて、バカになりそうなくらい気持ちいい。浮いていた腰が勝手にへこっ♡ へこっ♡ と揺れてアピールするのが止められない。
焼ききれそうな理性の中で必死に首を振る。

「ブッ♡ あっ♡ やらあ、ううっ、いじ、って、にやいい……っ♡♡」

「嘘だーめ。いじってなかったらこんなでつかくなんないでしょ……ほら、正直に言わないとカリカリやめちゃうよ？ こうやってクリに指添えるだけにしちゃうけど、いいの……?」

優しくカリカリ♡ していた指が急にぴと♡ と添えられるだけになって、甘い刺激が止んだ。

焦れったさに無意識のまま腰がかくかく揺れる。こんなの恥ずかしいはずなのに、物足りなさが勝ってねだるように視線を合わせてしまった。

「あうっ……………うう、やら……………それ、つゆび、やらあ……………♡」

「ふ……………やだよね、早くいじってほしいね。じゃあ俺にちゃんと教えて？ 普段から自分で、クリいじってるんだよね？」

「ううう……………」

（恥ずかしい♡ 恥ずかしい、けど♡ ぴとって指くっついてるだけなのやだ♡ 腰かくかくしても焦れっただけで足りないよお♡ はやく、はやくいじってほしい♡ もっとカリカリ、して欲しい……………♡）

見下ろす視線にきゅう、と喉が詰まる。

わたしは恥ずかしさに全身を震わせながら、小さく小さく、こくりと頷いた。

「はー……、かつつわ……。教えてくれてありがとう、いいよ、いっぱいいいじつてあげる」
「あ、ん、ん、うあッ♡ あっ♡ ううゝつ、せんぱ、それ……きもち、い……♡♡」
「ん、いい子、俺の手でクリいじられんの、きもちいい、きもちいいね……」

カリッ♡ カリカリ♡
ぬりゅぬりゅぬりゅ♡

甘やかすような声音と共に腰が痺れるほどの快感が襲ってきて目の前が瞬く。
またクリトリスをいじつてもらえたのが嬉しくて抱きつくと、褒めるように爪先で先っぽをなでなで♡ してくれて、犬のような荒い息が出てしまった。

「は、はっ、はひっ♡ あっ!?!♡ んああっ♡ らめ、それ、つよいい……あ♡ あ、っ
うあ♡」

「ぴんぴん弾かれるのも嫌いじゃなさそ……うわすっご、腰へコもマン汁も止まんないじゃん。白瀬さん、こんなエッチな子だったんだ……」

「うう、ン♡ ちがっ、ちがう、のに、っあ♡ あ、あゝっ♡」

「ふ……ごめんごめん、大丈夫。エッチで可愛いよ、って意味だから、ね？　白瀬さんのエッチなところ、俺にもっと見せて……？」

ぴん♡　ぴん♡　なでなで♡

からかうように爪先で弾かれたかと思えば、ビクつくクリトリスをいい子いい子ってするみたいに撫でられて、緩急のある刺激に目の前がちかちかとする。

じわじわと迫る絶頂感におまんこがきゅん♡　と戦慄いてきてしまった。

震える指先に力を込めて黒崎先輩のスーツをぎゅっと掴む。

「っは、あ、あっ♡♡　らめ、せんぱ……っもおだめ、わたひ、だめ、だからっ♡♡」

「駄目？　ああ……いきそう？　白瀬さん、パンツの上からクリちよっと撫でられたくらいでいきそうなんだ……」

こすこすこす♡　と擦る指は止まってくれない。わたしの腰のカクつきに合わせるように指を添わせて甘い快感を送り込まれ続ける。

ぼやけていく視界にどこか意地悪げに口を薄く開いた先輩の顔が映った。

「……よっわ♡」

「ひいん……っ！？♡ ああやだ、まつでえ、あっ！？♡ らめ、いく、いつぢやうう、あああ、~~~~っ♡♡」

耳元に吹き込まれた言葉を認識した途端、びくびくびく……っ♡ と背中が弓形に反る。甘い刺激が全身を駆け巡って止まらない。びく、びくっ♡ と揺れるクリトリスをやさしく抑えつけられて、それが気持ち良くてまた快感が長引く。

（はあ……はふ……♡ きもちよすぎて、いつぢやった……♡ うう、いじわるなこと言われながらいつぢやったの恥ずかしすぎる……、……あれ？ なんで、黒崎先輩……わたし、お、おまんこの前に、膝、ついて……？）

「いつぢやったね、白瀬さん。俺にクリ撫でられて……煽られながら、いつぢやったんだ……」

「は、ふあ……？♡ あ、えっ？ なに、先輩……ま、まって……」

「ごめん、あんなエロいいき方されて待つ普通の普通に無理」

問答無用で濡れてしまったパンツを脱がされる。恥ずかしくて必死に足を閉じていると、膝小僧にちゅっ♡と唇を寄せられてくすぐったさに足先が震えた。

「足開いて？ イったばっかの生まんこ、俺に見せて」

「っっ!?! やつ、むり、そんな……恥ずかしいので、ひゃうっ!?!」

「あー、恥ずかしがってるトコ無理やり開かされる方が興奮する……?」

何度も口付けられて震える太ももを、ぐ……っ♡と押されて開かされる。そのまま引き寄せられてソファに預けた身体がずり下がり、まるでおまんこを差し出すような体勢になってしまった。

目の前に座った黒崎先輩は、うっとりとしたようにわたしのおまんこを見つめている。

「あー、すっご……てらてらで、ぷりぷりして……美味そ……♡」

「っあ、うそ、先輩……ほんとに、まって、だめっ、そんなとこ、っあああ……っっ♡♡」

れろ……っ♡

ちゅ♡ ちゅうつ♡ れろっ♡♡

熱い舌がクリトリスに当たって、いったばかりの敏感なおまんこにひくんっ♡ と力が籠もる。

強すぎる刺激に逃げたくなるけれど太ももをがっしりと抑えられてしまっただうすることもできない。

「やあ、あ、あっ♡ ま、って、くろさき、せんば……わたひ♡ いったばかり、だからあ……っ」

「んー……？ イったばかりだから、なに？ 俺が白瀬さんのまんこ、こうやって……ん、ちゅ……っ、……舐めんのと、なんか関係あんの……？」

「っひ♡ ひいっ♡ ううつ、あるからっ、敏感だから……っあああっ♡」

ぬろ♡ ぬろ♡

ちろちろちろ……♡

舐める勢いを弱められて余計に腰が浮く。欲しがるようにかくかく……♡ と小刻

みに揺れてしまうのがたまらなく恥ずかしい。

（ちがう♡　ちがうのに♡　弱くしてほしいとか、そういうことじゃないのに……うう♡
弱い之余計キちゃう♡　いったばかりの敏感クリ、甘やかすみたいにゆるゆる吸うの、ダ
メ……っ♡♡）

「ほんとだ、めっちゃ敏感だね。吸うたびマン汁とろとろ出てきて……口ではだめだめ言
いながら、まんこで誘ってくるの、上手じゃん……♡」
「……うう、やつ♡　かつ、かつてに、でちゃ……っひ、んん……っ♡♡」

れろれろ♡

ちゅぽ♡　ちゅぽちゅぽっ♡

勃起してしまっているクリトリスをフェラされるみたいに吸われて脳天から突き抜ける
ような気持ちよさが襲う。

そんなに吸ったらまた大きくなってしまふのにと、力の入らない腕でくしゃりと黒崎先
輩の綺麗な黒髪を掴んだ。

「ん……なに、どっち？ それ。全然力入ってないから、やめてほしいのか、わかんないんだけど……」

「んひいっ♡ ううっ、やっ♡ やめてえ、先輩……く、くりっ、また、おっきくなっひやう、からあ……っ」

「いいじゃん、おっきくしようよ。大丈夫だよ、白瀬さんが今以上のデカクリになっても、ちよつと擦れただけで発情しちゃうようになっても、俺が責任持つて毎日シコシコしてあげるから……♡」

そんなの絶対だめなのに、っと思うのに、甘やかすみたいになたれろお……っ♡ と舐め上げられて足先まで力が入っていく。

気持ちいいのが止まらなくて、結局黒崎先輩の頭をただ持つて自分のおまんこに押し付けるみたいになつてしまつて恥ずかしい。恥ずかしい、のに。

（ダメなのに♡ これ以上おっきくなつたら絶対ダメなのに♡ シコシコされるの想像してぞくぞくしちゃうっ♡ きもちいいのとまんない♡ あ、あ、それすき、ちゅって吸われな

がら先っぽちろちろ舐められるの好き♡ やばい、犬みたいな息、止まんない……っ♡♡)

「はっ、あっ、おああっ♡ せんぱ……ほんと、にい……こんな、あうっうう♡ らめ……っも、くせに、なっちゃうからあ……♡」

「ふ……想像したんだ、白瀬さん。俺に毎日デカクリシコられていくの想像して、癖になっちゃう♡ って思ったんだ？ あー、ほんと、かわいい……」

ちゅっ♡ ちゅううっ♡

れろれろれろろ……♡♡

硬く大きく育ってしまったクリトリスを飴玉みたいに舐められて全身に力がこもる。こんなあっさりまたいきたくない♡ と思うのに、身体はどんどん絶頂の準備を初めてしまう。

「ふう♡ ふう♡ うづー……せんぱ、つも、もおっ♡ はなひて、また、きちゅうから、いっっちゃうからっ♡」

「んー……なに、もういきそうなの。早くない？ もうちょつと我慢してよ、俺まだ、白瀬さんのまんこ舐めてたいから……」

「やつ♡♡　だめ、もお、なめるの、っうあ!？　あ♡♡　やつ♡♡　ひっばっちや、だめえ、あゝ♡♡♡♡」

ぐいい……♡　とおまんこの肉を引っ張られて、より露出するクリトリスを裏筋の根本から撫でられる。ただでさえイきそうだったのに、そんなことされて我慢できるわけがない。

ひく♡　ひく♡　とおまんこが締まってしまいう度に快感が襲う。

我慢しなきゃ、と思うほどに絶頂感が押し寄せる。

「ふ……ずる剥けのクリ皮引っ張られて舐められるの気持ちいいね？　先っぽびくびくさせながら一生懸命我慢してんの偉い偉い……♡」

「ううう……♡　も、むり……っあ!？♡　ああだめ、だめ、せんば、それ、イぐからあ……♡♡」

「だーめ。ほら、我慢、我慢、がーまーん……」

（むり♡　もうむり♡　我慢むり♡　イきそうなクリちゅぽぽって吸われちゃうのダメ

♡ 腰持ち上がっちゃうのに、舌離れていつてくれない♡ ああだめ♡ もうイク、イク、
イッちゃう……っ♡♡♡

「あ、あつ、あッ♡ せんぱ……ごめつ、イっちゃ、も、イぐ、ううう……っ♡♡」

びくっ♡ びくびくびくっ！♡
ぷちゅ♡ とろお……っ♡♡

いった拍子に何度も収縮を繰り返すおまんこから愛液が溢れてお尻を伝っていく。その間に起き上がった先輩が、力の入らない身体をぎゅっと抱きしめてきてきて頭の中が多幸感でいっぱいになった。

「ん……イっちゃったね、白瀬さん。我慢できなかったんだ」

「はっ、ふあ、あ……？♡ ううっ、ごめんなさい……黒崎先輩にしてもらうの、きもちよすぎて……」

「何それ、可愛い……全部許したくなる……。でもだーめ、我慢出来なかった子にはお仕置きしないとね」

「へ……っ？　お、おし、おしおき……ひゃっ」

ウェットティッシュで口を拭いた先輩に首筋へキスされながら、不穏なことを言われて。お仕置きという響きに慄きながらも、また触れてもらうことを期待してしまつて……お腹の下の方がひくん、と疼いた——そのときだった。

「あれ？　電気ついてる。おい、誰かいんの？」

入口の方から靴音と共に——森下先輩の声が、聞こえてきた。